

大野公士作品集 存在についての考察 全文和訳

彫刻家

2009年のデルフト文化年において、ワールド・アート・デルフトのディレクターであるパウラ・カウエンホーベンは、「デルフトへのオマージュ」のテーマで恒例のサマー・シンポジウムを開催し、海外から芸術家を招待した。私はその名を冠した展覧会のセレクションを任されるという光栄に授かり、そこで初めて大野公士に出会った。大野はロッテルダム通りの前庭で、巨大な木の幹を彫っていた。「木は非常に扱いにくいんです」と彼は教えてくれた。短い滞在期間の間、大野はその木をひたすら切り刻んでいた。その姿は彼の献身、情熱、技巧力、そして素材に対して素晴らしく精通していることを示していた。

今回のテーマに対してどのように取り組むつもりかと聞かれた大野は、すでに東京の自宅を出る時から、オランダ人商人であったヤン・ヨーステン・ファン・ローデンスティン(1556-1623)を使ってデルフトを称える作品を作ると決めていたのだ、と言った。デルフト市民を含め、多くのオランダ人にとってヤン・ヨーステンは無名だ。デルフト市内にある小さな中庭につけられた名前から、その名前を憶えている人が若干いる程度であろう。しかし日本ではそうではない。「東京にある“八重洲と”いう地名は、ヨーステンの名前から来ているのです。それ自体がすでにデルフトに対するオマージュですね」、と大野は説明してくれた。

ヤン・ヨーステンは1958年、デ・リーフデ(博愛)号に乗ってデルフト港から世界中を巡る旅に向けて出発した。そして日本に着いた彼は、その後二度とそこを離れることはなかった。デ・リーフデ号とオランダの象徴とも言えるライオンの像を用いて、大野はヨーステンを彼の故郷、デルフトの街に甦らしたのだ。

Daniëlle H.A.C. Lokin

Midwolde, December 2019

ダニエレ・H.A.C.・ローキン

ミッドウォルデ、2019年12月

アーティストについて

教育

大野公士は1971年に首都東京で生まれた。彼の父は長年アブダビで働き、日本に住む家族が彼と顔を合わせることはほとんどなかった。寂しさを紛らわせるために、大野はまだほんの幼い頃から絵を描いたり、粘土細工を作り始めた。絵を描くことで大野は精神的な均衡を保つ

ことができ、そのことが両親の不在を補ってくれたのだ。このことを大野は「精神を正常に保つための脱出」と呼んだ。その後大野が目的に合わせて物質を巧みに扱う技法を徐々に習得するにつれ、この頃しきりに絵を描いたことで会得したことが、その後の彼の彫刻にも生かされるようになった。若いころから大野は、将来は芸術家になりたいと考えていた。その内に秘めたものは、彫刻を芸術作品へと高めてくれる四次元の追求へと彼を駆り立てていった。

幼くして大野は、この世には触れられるもの以外の世界があることに気づいていた。彼はごく幼い頃に両親に、毎年先祖の墓参りに連れていかれた。彼に仏教の存在を教えたのも両親だった。ペタ(パーリ語仏典における死者の靈魂・餓鬼)の世界は、仏教の宇宙における四つの「痛みを伴う世界」の一つである。ペタは通常、この世を去ったものの、生前に所有物や社会的関係から距離を置くことができなかつた人々の精神を表す。ペタはしばしば生前に住んでいた場所の周りにとどまり、そのため人々は彼らのことが見えたり匂いを感じられたりすることがある。ペタが望めば、彼らは特定の人々に自分たちの存在を明らかにさせることができ、彼らの死の原因となった身体的損傷を見せることもある。もしも人の死が予期せぬものだった場合、その人が次の人生でペタになる可能性は高い。しかしながらこの時点では彼は、自分が実際に死んでいることにはまだ気づいていない。ペタは時として物を動かしたり、怪我をさせたりして人々を怖がらせようとすることもある。

そしてペタがようやく以前の生活の気になる事情や些細なことから手を放すことができると、彼らはペタとしての存在を離れ、彼らの業や過去、または現在の意図に従って新しく生まれ変わることができる。人々がペタ(あるいはペタが結び付けられている過去の人生)の名の下に善行を行うと、ペタは彼らの現在の人生からより早く離れることができるのだ。

ペタはしばしば、彼らの名の下に人々が善行を行ったり、お供え物をしたりすることを望む。それらお供え物は、手を付けられていないように見えても、ペタはその本質を消費することができるのだ。

大野は中学生の時、初めて霊を見た。それは亡くなった彼の祖母だった。そこに言葉はなかつたものの、彼は祖母を助けることができると感じたと言う。

1970年代のベビーブームの時に生まれた団塊の世代は、多くが進学の機会を阻まれたが、大野は幸運にも現役で多摩美術大学に合格し、彫刻学科で学士号と修士号を習得した。そこで彼は、さまざまな素材を使って独特のフォルムを作り出す喜びを知ったのだ。

“Sculpture”を意味する日本語の「彫刻」という漢字には、「彫」(彫る)という空間的概念と、「刻」(刻む)という時間的概念が含まれており、彫刻科の生徒たちは日々、両方の技術に腕を磨いている。言い換えれば、彫刻とは過去から現在、さらには未来へと際限なく続く時空の記念碑なのである。そこでは幾度となく、「彫刻とは何か」という問題提議がなされる。そして大野にとってここから必然的に続く問いは、「存在」と「死生観」への根本的な問いかけなのである。

大野は、実に個性的なメガロポリスである東京に育った。東京は今でも魂の死後の世界の存在を信じる東洋哲学や宗教と、古典古代ギリシャから続く科学的かつ学術的文明より生まれた西洋文化が融合した「るつぼ」だ。その影響もあって、大野は長年に渡って古代東洋からギリシャ哲学に至るまでの「存在」に対する世界的な影響、そして量子理論と相対性理論について思考を続けてきた。彼の芸術的表現には根底に二つの概念がある。それは「存在するかどうか(存在についての考察)」と「生と死に対するビジョン」である。大野はこれらが世界とどのように関係しているかを思慮深く分析している。そのため大野は、美大を卒業したのち医科大学で解剖学と美術の関係の研究を続けた。彼の芸術作品は彼の思考的実験が特定の場所の文化と歴史に融合されることで生まれるのだ。

28歳の時に大野は初めてヨーロッパを旅行する機会に恵まれた。イタリアではローマ、ベニス、ミランとフィレンツェを訪れ、そこでミケランジェロの彫刻、特にダビデ像に深い感銘を受けた。人間がどのようにして作られているかを研究すると、人は創造主に近づく。そのような考えはルネサンス期にさらに発展し、「人間は万物の尺度である」ということわざで表現された。人間のプロポーションは、さらに建築の出発点としても使われた。そしてそれは大野の興味とちょうど合致したのだ。ミケランジェロのダビデ像を見ると、それは明らかに普通の人間を描いているのではないことがわかる。ルネサンス期において人物像は全て理想化されて、ギリシャやローマの彫像を彷彿とさせた。さらに、彼らはもはや建築の一部ではなく、独立した人物として立っていた。ダビデ像は古代以来、このような巨大なサイズ(5.5メートル)で作られた初めての裸像であった。そして人物像を裸のままにすることで、芸術家は自身の解剖学の知識を示すことができた。そのため、彫像は本物そっくりに見えなければならなかった。ルネサンス期において、芸術家は解剖学を学ぶことによって体の内部構造(筋肉、骨、血管)が、外部形態にどのように影響するかを発見し、そのため人物像はより写実的になったのだ。

ミケランジェロによる彫刻は、その大きな手足、そしてその眉をしかめた顔つきが印象的だ。ダビデは強く、筋肉質の若い男で、恐れを知らないように見える。のちにゴリアテを殺すために使った投石器はさりげなく彼の肩に置かれている。彼は落ちついているように見える一方、すぐに攻撃態勢に入れるように緊張しているようにも見える。これはまさにミケランジェロが表現したかった通りのものだ。ミケランジェロは、人体を魂の拘置所とみなしていた。大理石の下では戦いへと挑むダビデの魂がふつつつと生まれ出たのである。

存在に関する考察

大野は卒業後、芸術家として本格的に活動を始め、木彫作家としてのキャリアを確立した。ほぼ毎年個展を開催し、1999年以降はグループ展にも参加している。人体は彼の作品の一貫したモチーフであった。彼は技術的なスキルを磨いただけでなく、医科大学の解剖学研究室に

入学を認められた後、徹底的に人体の構造を研究した。彼の創造的な手法は独特だ。興味深く曲がった等身大の木彫りは切り刻まれ、くり抜かれる。その形は、細く湾曲した木が持つ繊細さと力強い緊張感といった両方の特徴を示しており、まるで人体の皮膚のように発達している。さらに大野はこの人体を金属フレームにぶら下げることによって、人間がもたらず最小限の空間を示唆している。そしてこのことによって、身体に隠された「精神」の存在が明らかになるのだ。

それぞれの作品において大野は、「正常であり避けられないことができない生と死の見方」と、「仏教哲学の空性と物理学の理論における存在の関係」を表現しようとしている。彼の芸術作品の表現方法は、インスタレーションの表現方法に少しに似ており、しばしば特定の場所に置かれた繊細なディテールで作られた空洞の彫刻が意味するものと、異なる空間に0.2mmもしくはそれ以下の細い絹糸を繋ぎ合わせることで作った作品とを組み合わせている。大野の興味の対象はすなわち、最近の量子物理学及び天体物理学の発展と、「龍樹」仏教における空の概念との関係なのだ。

仏教では「空性」の意味を理解することが、宗教訓練の最高点であると見られている。最も深い形の瞑想と共に完璧な美徳を体系的に追及することは、最高の知恵を啓蒙することに導いていく。この訓練を終了すると、人は空性が存在の究極の性質であることを理解するのだ。

現代物理学の量子論の概念は、この「空性」に非常によく似ており、仏教の哲学理論と多くの類似点を共有している。

彫刻家としての大野

彫刻家の大野は長い伝統に基づいて活動しているが、一方で常に変化を求め、限界を超えようとし続けている。彼の魅惑的な視覚言語では、どのような技術を使おうとも空間が中心的な役割を果たしている。長年に渡る活動で、彼は彼にとって何が最も適しているのかを発見し、そしてそれを深め、体系的に研究してきた。ここで技術とフォルムは、常にコンテンツの目的に依存している。徐々に彼は自分なりの言語とビジョンを開発していった。彼の作品は自然、さらにそこに生き、育ち、進化し、そしてまだ完成していないすべてのものへの賛辞であり、それは人間の周りに織り込まれているのだ。

年月を経て、大野の作品は基本的な構造の発達を遂げてきた。そして大野のイメージはより多くの動きと抒情性を表現するようになった。閉鎖的で、複雑な基盤から始まったものが、だいに壊れやすい要素を追加していくことによって、それぞれの作品の質量を大幅に変えていった。重力によって地球に縛られているかのように見えたイメージは、このことによってもっと軽快な特色を持つようになったのだ。

やがて、追加という作業はますます重要性を増していき、そして彼は今やそれらを、強く現実
にしばられた木、金属、絹糸といった素材を使い、完成した作品が実際には実態のない何かを
描写する時に必要とするボリューム、複雑さ、そして動きといったすべての要素のために使うこ
とができるようになった。これらの芸術作品の外面からは、内面の精神性がにじみ出ている。
彫刻に透明性を実現することは容易ではないが、大野は技術的才能により、作品に一貫して
光を注ぎ、四次元化させているのだ。

大野公士の作品は、視覚的、創造的、触覚的、そして感情的なさまざまなレベルで作品を伝え
ようとしているが、根底にある考えは成長と発展の強調だ。芸術家にとっても視聴者にとっても、
イメージは開示と発見のプロセスを表している。これは自主的なプロセスかもしれないが、芸
術作品がそれ自体だけでは決して成り立たないことを大野は素直に認めている。作品の起源
は独特かもしれないが、その制作は相互作用の成果である。作品の成功は、部分的には観る
者自身が抱える歴史に依存している。このやり取りが行われた時にのみ、彫刻は真の意味で
完成するのである。

大野の作品のもう一つの要素は、彫刻には皮肉やレトリックが含まれていないのだから、真の
社会変化の言語と成りえるはずだ、という信念だ。彼の表現はミケランジェロの彫像と同様の
新しい直接性を持っている。その直接性とは、まさに彼を最初に彫刻芸術に駆り立てたものな
のである。

大野の作品表現に私たちは、「人生の意味」、そしておそらく、さらに大切なこととして、「意味
のある人生を送るために、さらに努力するための刺激」を見出すのだ。

作品解説

Iconography of 'A History of Insanity'

2020年

材料:プラスチックモデル、家具

大野公士の最新作は彼のインスピレーション、研究、そして思考が融合したものである。ここで大野は、2017年の作品、*Iconography of Adage*と同様、彼自身の物語を、イメージを通して伝えるという手法を使っている。そしてここでも彼の作品の基盤となるのは、デジデリウス・エラスムス(1466-1536)の著書、『痴愚神礼讃』と『平和の訴え』だ。

『格言集』の初校から『平和の訴え』の間に、エラスムス自身が「こぼれ話」と称している『痴愚神礼讃』が出版された。この本の中で彼は平和について、というよりもむしろ反戦について語っている。事実、この本の第23章は全編が戦争にあてられている。戦争は寄生虫、仲介者、泥棒、暗殺者、悪党、愚か者、債務者、及びその他のくずのような人間たちのみによって行なうことができる。エラスムスにとっては教皇や教会ですら非難の対象であった。曰く、戦争とはあまりにひどいもので、それは人間のためというよりも、むしろ野獣のためにあるといい。あまりの無意味さに、詩人たちは戦争を、復習の女神であるエリーニュスからの贈り物とみなしていた。そしてそれはあまりに伝染的で、道徳の完全な腐敗を引き起こす。戦争はかくも不条理で、最悪の類の泥棒こそがまさにそれを行うのだ。そして戦争とキリストの間には一切の接点もないほどに不敬なものであるにもかかわらず、教皇は全てを見捨て、戦争にのみ執着するのである……¹

大野は戦争の危機がますます現代の日常生活に浸透してきていることを危惧している。戦争はポピュリズム、過激主義、歴史修正主義、憎悪のプロパガンダ、移民への反感、そして世界中のあらゆる武力抗争といった手段によって進められている。エラスムス以外にも、大野はピーテル・ブリューゲル(1525-1569)の絵画、『子供の遊戯』や、トーマス・モア(1478-1535)やポール＝ミッシェル・フーコー(1926-1984)の著書からもインスピレーションを受けている。

大野は彼の絵画的言語を表現するために、中古家具店で革張りの椅子2脚、17世紀の模型、茶卓を調達してこれらを作品に使用している。それらは2枚のヨーロッパ地図の前にまるで中世の祭壇のように置かれている。このインスタレーションではおもちゃの巡洋艦、潜水艦と、2機の飛行機が目立つ場所に配置されている。これらが示唆しているのは戦艦ポチョムキンとB29爆撃機だ。巡洋艦と潜水艦は最初の原子爆弾の一部を搭載し、そしてそれらはB29によって広島や長崎に投下された。戦争の狂気としてこれ以上の証はないであろう。

In the Mist -Rokko Meets Art 2019- 2019 年

材料：絹ミシン糸50番、クスノキ、UV ライト

六甲ミーツ・アート芸術散歩は、神戸や大阪から公共交通機関で1時間弱に位置する標高932メートルの六甲山で行われる芸術祭だ。ここで大野は *In the Mist* という彫刻作品を展示した。このような環境のため、六甲は常に霧が深い。そのため霧の中を日光が通り抜け、その光線の逆光で人物像を浮き上がらせる、という現象が起こる。すなわち、現れた人物像は光の反射によって作り出されているのだ。これはブロッケン現象という、大気光学現象に発想を得ている。

仏教では、光、特に反射は神、そして「悟り」と「会得」を表す。悟りを開いた人は、我々の精神の機能がいかにして我々を苦痛に閉じ込め、そしてその精神において、このような苦痛が根絶されていく変化の過程を見る。そのため、僧侶たちはしばしば瞑想をしようと山に向かう。大野にとって光とは物事の「本質を見る」こと、すなわち空性をも表している。しかしながら、苦痛と空性への洞察だけでは、決して苦痛を排除することにはならない。完全な悟りに到達するためにはこのような覚醒は始まりにすぎず、さらなる修業が必要なのだ。大野の人物像はまるでロシアの聖像のようにまばゆいばかりの黄金の光を放っており、それはまるで神の子イエスの背後に輝く光のようだ。その人物像は霧を連想させる繊細に織られた絹糸の網の中で、緻密な反射を受けている。

この作品の中では、大野の不思議な絵画的言語によって、二つの文化が美しく融合しているのだ。

Quantum Entanglement 2019 年

材料：絹ミシン糸50番、クスノキ、UV ライト、LED 灯、合板

これらの割り抜かれた木彫は、1本の木から彫り出されたものだ。細いところは僅か1mm幅という繊細な作品であるが、それにもかかわらず力強い存在感を放っている。20世紀における量子力学と相対性理論は、時間、次元、そして存在の概念を大きく変えた。現代の物理学における量子論は空性という概念に極めて似ており、それ故、仏教哲学に共鳴する。

我々の体は細胞でできており、細胞は分子でできており、分子は原子でできており、そして原子は量子でできている。量子の成分の大きさと質量は近代物理学における私たちの認識では確定することができない。それどころか、量子が点であるのか波長であるのかすら、私たちに理解できていないのだ。それにもかかわらず、我々の体、生命、そして我々が生きるこの世

界は量子によって構成されている。私たちの体内には系統発生論によって得られた固有の記憶がある。しかしながら、我々は、自分たちの体の構造や謎について完全に分析できているわけではない。これらの彫刻は、私たち自身の存在に疑問を投げかけているのだ。

Quantum Fluctuation

2019 年

材料：絹ミシン糸50番、彩色されたクスノキ、UV ライト、合板

20世紀における量子力学と相対性理論は、時間、次元、そして存在の概念を大きく変えた。現代物理学の量子論における量子ゆらぎの概念は「空性」によく似ており、そのため仏教哲学の考えと多くの類似点を共有している。私たちの体は多くの細胞から構成されており、そして細胞は多くの分子から、分子は多くの原子から、そして原子は量子から作られている。量子の成分の大きさと質量は、我々の近代物理学ではまだ確定されていない。さらには量子が点として見なされるべきか、それとも波長として見なされるべきか、まだ定かでない。したがってそれは大野の視覚的解釈に判断を委ねられているのだ。

しかしこの世界における我々の存在の性質を考えると、私たちの体と生命は、変動する量子で構成されていると言えよう。哲学者、物理学者、そして数学者であるブレーズ・パスカルは「人間は自然のうちで最も弱い葦の一茎にすぎない、だがそれは考える葦である」、とその違いを表現している。我々の体には系統発生によって受け継がれてきた古い記憶が生きている。しかしながら、我々はまだ、私たちの体の構造を完全に分析できてはいない。大野によるこの視覚化は、この問題に対する彼の個人的な見解を示しており、さらには「人間の存在とは何であるか？」という問題提起をしている。

木製の人体彫刻一体が、箱の中で浮遊している。これらは1本のクスノキから作られている。もう一体は直径 0.2mm の絹糸で作られ、そこでは「人工知能」に使用されるバイナリーパーセプトロンと同じアルゴリズムが使用されている。ⁱⁱ

Introspection

2018-2019 年

材料：絹ミシン糸50番、彩色されたクスノキ、UV ライト

この作品は、人体を使って無限の空間を体現している。比喩的な彫刻を得意とする大野は解剖学を専門としているが、彼の人体への興味は視覚可能な物理的次元を超え、物質と精神、

意識と空間の間に存在する歴然とした違いを取り除こうとしている。このサイト・スペシフィック・インスタレーションは、観る者を重力のない別次元へと連れていってくれるのだ。

それは織り交ぜられた人体像が空間に浮かぶ無限の世界である。ホールの両側に浮遊する男女の像は、木から彫り起こされた空洞の、極めて繊細な木材彫刻であることがわかる。生命のエネルギーが流れるよう器のように両端は開いている。そのほかの空洞はそれらの儚さと、存在の脆弱な性質を思い起こさせる。

頭上から吊り下げられた人物像は体から独立し、識別されたアイデンティティーには束縛されていない。これらは彩飾された絹糸で網のように織られており、まるで内と外の世界の間で発信と伝達を同時に行う人間の脳の神経網を連想させる。

大野が絹糸を織る方法は、人工知能でも使われている二元構造を模倣している。

空中に浮かぶメインの彫刻は、禅仏教を中国にもたらした仏教僧の菩提達磨(470-543)の絵巻物からインスピレーションを得ている。壁に向かい深く瞑想する達磨は悟りに達し、個々が独立した実態としては存在しないことを認識している。意識と世界の間相互関係を考察することは、明確な境界を消滅へと導くのだ。

大野の作品はまた、宇宙を粒子とゆらぎが同時に起こる連続した空間として捉える、量子物理学の影響も受けている。私たちが特定の現象を観察する手法も、同様にこの動きに影響を与え、創造し、輪郭を描いている。相互に絡み合った絹糸の網で作られたこの菩薩達磨の像も、この洞察の本質と、禅におけるスニヤタ(空、もしくは空性の概念の意味に触れている。この彫刻は、人間の存在を周囲の環境と切り離せない意識の塊と捉えているのだ。ⁱⁱⁱ

Iconography of Adage – Dulce bellum inexpertis, Adagiorum

Collectanea -*4^{iv}

2018 年

材料: 絹ミシン糸50番、クスノキ、木材、子ども用椅子、UV ライト、アクリル、プラスチック

まさにエラスムスのためにある‘Dulce bellum inexpertis’ という諺は、戦争は経験したことがない者には甘い、の意である。1515年版の『格言集』で、エラスムスはこの諺に関して長い論文を書いている。それは比喩や寓話といった性質のものではなく、戦争や暴力を激しく非難するものであった。曰く、神は人を敵意と戦争と攻撃のために造ったのではなく、友情と平和のため、そして互いを助け合うために造ったのである。

エラスムスは、人は戦争をしている時、いかに野蛮に成り得るかを示そうとしていた。原始人は最初に野生の動物と戦った。そこから人はさらに暴力への道へと突き進んでいった。まずは

それらの動物を食べ始め、そして最終的には殺人の訓練を受け、自分と同じ人間を殺し始めた。それは最初は素手のこぶしを使った一対一の闘いであったが、次第に大きなグループとなり、刀、毒矢、そしてそのほかの地獄のような武器を使うようになっていった(Erasmus 2011、pp. 542-549)。^v

大野は主張する。「偉大な人道主義者であったロッテルダムのデジリウス・エラスムスは、人間が500年前から戦争を止めることができていないことを嘆いていた。彼はまた、キリスト教徒とイスラム教徒、カトリック教徒とプロテスタント、と言った宗教紛争の批判にも焦点をあてていた。そして500年経った今でも、人間は同じように戦争を続けているのだ。

21世紀に入ると科学と技術はさらに進歩した。

コンピュータ技術によって人間のDNAの構造はすでに分析されている。もしも量子コンピュータが開発されれば、人間の神経細胞をマッピングすることも可能になるだろう。しかし人間の脳を分析した後でも、私たちは戦争を続けるのだろうか？」

大野は子供椅子に座らせた4人の子どもを、青く配色された正方形の4辺に配置しているが、これが暗示するのは死だ。高椅子に備え付けられたテーブルには、金属皿の上に装甲戦車という食べることのできない食事が置かれ、その砲身はそれぞれ向かい合った子どもに向けられている。それぞれの皿は明るい光によって照らされている。子どもたちは座った状態で攻撃態勢に入っているが、まずは最初にさいころが振られなければいけない。誰が最初に撃つかは運命のみが知っているのだ。

The Elephant

2018年

材料：鉄、デルフト工科大学研究室内の廃金属

1867年に設立された Gezelschap Leeghwater (訳者注：干潮クラブ、の意) は、デルフトにある工科大学の機械工学の学生会であり、現存するオランダの学生会としては最古のものである。Gezelschap Leeghwater のシンボルは象だ。設立150周年を記念して、3mE (訳者注：Mechanical, Maritime, Material Engineering の頭文字をとっており、それぞれ機械工学、海洋工学、材料工学の意) の学部にユニークなエンジニアリング・プロジェクトが企画された。機械工学の学生が大野と共同し、等身大の金属象を3mEの学部の前の池に設置することにしたのだ。

制作には研究室の資材が再利用された。壊れたソーラーパネルがリサイクルされた。尻尾には小さな風車がぶら下がり、目は電気スタンドによって作られた。大きな象の体と頭に使われた全てのパーツは、それらの元々の用途を反映している。自然界では、象は自分の耳を振っ

て体を冷やす。一方、この Leeghwater の金属象には2機のプロペラが組み込まれている。通常、水を飲む時に水を口まで運ぶ道具として使用される鼻は、巻き上げ装置になっている。そのため、学生たちはポンプと古い蛇口からパーツを選んだ。長い牙はドリルによって再現されている。

In the Beginning was the Word

2018 年

材料：デルフト工科大学ヘンク・ヨンカー博士による自己修復コンクリート

Hortus Oculus に設置されている芸術作品は、私たちの全ての感覚に訴える。芸術と自然を触覚、聴覚、そして視覚という形で共生させることが、このデルフトのロッテルダム通りにある彫刻公園の目的である。これはランド・アート・デルフト(LAD)のディレクターである芸術家、パウラ・ファン・コーウェンホーベンの提案によるものだ。

複数の国際的なアーティストが、この多機能庭園にアート作品を作るために招待された。最初の作品群は、「アーティスト・イン・レジデンス 2018」の期間中に制作されたものだ。

LAD はこのような手法で作品を実現させることを得意としている。アーティストは期間中その場所に滞在し、プロのサポートを受けながら最適な環境でそれぞれの作品を作り上げることができるのだ。

大野公士は、生物学者であり研究者であるヘンク・ヨンカースと共同で、「スマートマテリアル」(知的材料)による彫刻を作り上げた。これらの「人体像」は、コンクリートと苔を混ぜ合わせて作られた一連の彫刻作品の先駆けとなっている。これは、芸術と自然の共生だ。それぞれの彫刻の真のアイデンティティは、使われている素材の本質によって明らかとなっている。この作品は苔が中心的な役割を果たす日本の禅庭への言及であり、庭は宇宙の比喩として表現されている。

この共同作品では、革新的な種類のコンクリートが使用されている。この彫刻は、苔といった周囲の自然に存在する貴重な機能を使って、現代の持続可能な技術への明白な洞察を伝えているのだ。^{vi}

Human Memory I

2017 年

材料：鉄、廃棄された自転車

これはオランダの風景に対する日本人の見方である。大野公士はしばし、自然、生命、そしてそれに対して人々がどう向き合うかと言うことに触発され、巨大で、どこか距離を置いた風景を作り上げる。ランド・アート・デルフトのこの作品は、大野が干拓地の風景の歴史にインスピレーションを受けたものだ。それは水との戦いであり、堤防と干拓地、霧の中に浮かぶ風景とシルエットといったものを意味している。

大野はまた、干拓地の物語の裏に隠された、運河や水路から引き揚げられた何千台もの自転車の存在にも驚かされている。彼はこれらの古い自転車をリサイクルして人間の形にし、干拓地の記念碑として作り上げた。

大野の最初の作品はスヒップラウデンにあるレクリエーション広場、クラーイエンネストにある。この彫刻は高さ5メートル以上あり、ミケランジェロのダビデ像とまったく同じ大きさである。この作品はすべてが中古の自転車部品と、古い自転車のフレームから作られている。自転車はオランダ人にとって常に重要な実用品であり、彼らにとってのアイデンティティの一部として、オランダ人の記憶に刻み込まれている。

このプロジェクトで大野は、廃棄された自転車の部品に刻み込まれた記憶の断片を使って、記念碑的な人物像に新しい生命を吹き込んだ。作品はあまりに巨大であるため、人々は明らかにこれを無視することができない。人々は驚いたり、怒ったり、あるいは感動して立ち止まって考えるかもしれない。しかしどちらにしても彼らはこの作品を見上げ、何らかの形で関わらないわけにはいかないのである。

Human Memory II, Arc de Bicyclette

2017年

材料：鉄、廃棄された自転車

“De Arc de Bicyclette”は上記のプロジェクトの二つ目の作品だ。これはまるで *Human Memory I* を「霧の中のシルエットのように」囲む境界線、あるいはゲートのようである。この作品はデルフトのロッテルダム通りにある、ランド・アート・デルフトに建っている。二つの彫刻は向かい合い、一緒になって閉ざされた外観を形成して、それは干拓地の堤防、そして都市と田舎のつながりを象徴している。

このゲートを作成するために、大野は200台以上の自転車を必要とした。それほど大量の捨てられた自転車を集めるためには、地方自治体の協力が不可欠であった。

Regenerative Cells, the cycling human

2017 年

材料：鉄、廃車

デルフトのランド・アート財団は、デルフト工科大学創立 175 周年を記念した彫刻の制作を大野公士に依頼した。大野はこの機会を利用して、世界の気候変動との戦いに敬意を払った、小さいが独創的な作品を作ることにした。大野は中古車をリサイクルし、それぞれのパーツから自転車に乗る人物像を作り上げた。それぞれのパーツは、それぞれの身体部分に関連付けることができる。例えば腕は前輪とそれを支える部品で作られ、足は後輪とそれを支える部品で作られた。そして心臓は点火装置で、背部はテールパイプによって形成されている。無論、デルフトや工科大学のキャンパスの周辺では自転車が中心的な存在である。このアート作品はさらに、再生細胞を備えた人体への比喩にもなっている。この自転車に乗る人物像は、断固として水と戦い、高い堤防で干拓地を守るオランダ人を象徴している。自転車はオランダ人の DNA の一部なのである。

Neural network

2016 年

材料：絹ミシン糸 50 番、UV ライト

白い絹糸は、漂白段階に含まれている科学染料によって紫外線に反応して光る、という特性を持っている。極細のミシン糸を一本一本編み上げることで生まれた空間と、そこに浮かび上がる象徴的なイメージは、「人間の」脳と人工的に似た「神経網」の比喩のようである。網の中心に織り込まれた人物像は、暗い部屋に設置されたブラックライトから放出される紫外スペクトルによって浮かび上がる。そして 1940 年代まで製造されていたウランガラスもまた、ガラスに混ぜたウランが紫外線によって反射することで光りを放つ。それは 縫い糸のように暗闇で光り、放射性物質を人間の目に認識できるようにしてくれるのだ。

人工的に製造された物質は、人間の生活を豊かにすると信じられてきた。人類は、文明の基礎となる電気エネルギーを原子力発電所で生み出し、そのエネルギーを元にコンピューターを開発した。

人工ニューラルネットワーク(ANN)は、人間の脳内の生物学的ニューラルネットワークを人工的に模倣するシステムとして、コンピューターを使って作られた。ニューラルネットワークは、機械学習において重要な手段だ。これらのネットワークは、複数の、しかし単純なプロセッサで構成されており、入力と出力の間に複雑な関係があるモデル(非線形)システムと並行して働いている。私たちの脳と同様に、ニューラルネットワークのプロセッサもまた、ニューロンとも呼ばれている。

ニューラルネットワーク内のプロセッサ間の相互作用は適応性があるため、ニューラルネットワーク内の他のプロセッサ間の接続を形成することができ、さらに既存の接続を強化、弱体化、あるいは切断することができる。このことはすなわち、ニューラルネットワークは学習することができる、ということの意味する。ここで言うところの「学習」とは、システムが与えられた入力に対して正しい出力を出すことができるように、システムの限界を自動的に調整することを指している。ネットワークを流れる情報は、その入力と出力に基づいて変化、あるいは学習するため、ニューラルネットワークの構造に影響を与える。

パターン認識の例を挙げてみよう。ニューラルネットワークは、「人」または「人でないもの」と手動でタグ付けされたサンプル画像を分析して人物の画像を識別することができ、さらにこの結果を使って他の画像における人物も識別できる。ニューラルネットワークは、この手のアプリケーションで最も役に立つのだが、これはルールベースのプログラミングを使用する従来のコンピューターのアルゴリズムでは表現することが困難である。光学式文字認識から顔認識まで、適用されているアプリケーションは多岐に渡る。

この空間的なネットワークの中で、大野が作ったニューラルネットワークは、人物像や脳のニューラルネットワークと重なっているように見える。大野は、「人工知能」(AI)がオセロとチェスの両方ですでに人間の能力を超えていることを指摘する。「AI」は今後どう発展するのであろう？ 人工ニューラルネットワークとAIは、絵画、ダンス、歌と同じように、芸術形式に組み込まれてしまうのか？

あるいはそれらが、芸術を完全に支配してしまうのであろうか？

Requirements

2014 年

材料：絹ミシン糸50番、鉄、石、水、葉、UV ライト

このインスタレーションで大野は鑑賞者に、自然の隣には原子力発電所で溢れた世界が存在していると警鐘を鳴らしている。日本の芸術家にとって、この問題はウクライナで起きている戦争よりもはるかに緊急性が高いのだ。

「私たちには何が必要なのか？ 約 138 億年前、宇宙はビッグバンから始まった。現在の世界の人口は約 70 億人で、そのうち 30 億人が都市部に住んでいる。都市化というのは発展の証なのであろうか？ どのような手段で、私たちは 自然と共存しようとしているのだろうか？ それぞれの作品は、1 つの問題提起を表している。鑑賞者と共に、私はそれぞれの彫刻のイン

スタレーションによって提起された6つの質問すべてに対して可能な回答を検討したいと思っている。私達は一体どこに行くのだろうか？」

展覧会 *Requirements* は、6つの異なるスペースで6つのインスタレーションを展示している。最初の3つの部屋はミニマルな空間だ。黒と白の石で舗装された最初の部屋は、地球の長い歴史を示している。黒い石に囲まれた白い石を正方形に並べた構成は最小限で、古い窓から部屋に入る光の鏡像となっている。

2番目の部屋には水で満たされた池がある。世界のすべての生物にとって、水の価値が重要な要素となっていることは否定できない。白い海は母乳と同様、すべての生命の始まりである。続く部屋には鉄の細いワイヤーで作られた木があり、これは酸素の生成と二酸化炭素の吸収の隠喩を表している。

最初の3つの部屋が伝統的に生命を維持するために必要であった自然の要素に対する賛辞なのに対し、その他の部屋は現代の人間の生活に捧げられている。自然は非情な速さで破壊されており、そこに死が強引に入り込んでいる。

最大の脅威の1つは、原子力発電所のメルトダウンである。大野はこれを、補強材の輪を檻の形に溶接させ、抽象的な境界として描くことで表現している。ここで立方体が表しているのはすなわち死だ。

次の部屋は都市生活者のライフラインを象徴している。鉄のフレームによって表現されたパリのエッフェル塔、ロンドンのビッグベン、そしてニューヨークのクライスラービルでは、鉄の浪費が象徴されている。そして最後の部屋で、謎の物体が暗闇から降臨してくる。それは人類に助けと愛を施すためにやって来た仏陀なのだ。

Storage Element

2010年（2019年に再構成）

材料：彩色されたクスノキ、UVライト、アクリル、合板

この作品は、日本の伝統的なノミで一本の日本のクスノキを彫り、そしてそこから極めて細い、木製の人物像をくり貫く、といった特別な技法によって作られている。

人体を記憶素子として表現し、大野はDNAの存在に疑問を投げかける。^{vii}

人体はDNAの保存継承のためだけに作られているのだろうか？

人間の生命はDNAの保存継承のためだけに存在するのか？

近年、科学的研究が進んでおり、DNAは大容量記憶素子と見なされている。

しかし、人間の生命は DNA の保存のためだけにあるのだろうか？

そうであるとすれば、生命と精神性の関係は21世紀に大きく変化するだろう。生命が DNA の保存のためだけに存在するのだとしたら、それはどれほど単純なことであろうか？

しかし、禅の教義とビッグバン以前の宇宙はどちらも空虚と定義されている。

高められた精神性は人体の解剖学の研究、さらに人体の内部及び外部のデッサンに基づいて人間の中に宿る。

人生の意味とは？

私たちの魂はどこに向かうのか？

空の人体、そしてその内面は、人生の意味を問うであろう。

これは大野公士の彫刻や芸術作品が最初から追いつけているテーマである。

ⁱ From: Dr. P. Bange, *Erasmus over oorlog en vrede (Erasmus on War and Peace)*, Histoforum 2009

ⁱⁱ Website : European Cultural Center VENICE 2019 Art Biennale, PERSONAL STRUCTURES–Identities, Palazzo MORA, Strada Nova, 3659, 30121 Venezia, Italy.

ⁱⁱⁱ Website: Wilfrid Israel Museum of Asian Art & Studies, text Shir Miller Yamaguchi, curator of Wilfrid Israel Museum, Wilfrid Israel Museum.

^{iv} この本はエラスムスが 1508 年に、特に若い人の教育に使うために書いた所謂スタイルブックである。これは科学的な本ではなく単純に教本であり、したがって素人にも分かり易い内容となっている。

^v From: *Adagia: juwelen van het schrijven (Adagia: jewels from his writing)*, KB, Desiderius Erasmus

^{vi} 自己再生できるコンクリートによる建造物？まるでユートピアのような話だ。しかし微生物学者で発明家でもあるデルフト工科大学のヘンク・ヨンカース教授によると、それが実現する日は遠くない。ヨンカース教授は自然に触発され、コンクリートとバクテリアを混ぜた未来のバイオコンクリートを開発した。ヨンカース教授は言う。「この石灰石を生み出すバクテリアの素晴らしいところは、コンクリートの中で 200 年以上も生き続け、さらには損傷が生じた時には自ら修正することができるということだ。例えば、コンクリートへの圧力によって亀裂が生じた時、このバクテリアは自然な方法で再びその亀裂を埋めることができるのだ」。

^{vii} DNA、またはデオキシリボ核酸は、人間、そしてその他ほとんど全ての生物の遺伝物質である。人間の体のほぼ全ての細胞は、同じ DNA を持っている。DNA の情報は、アデニン(A)、グアニン(G)、シトシン(C)、およびチミン(T)の 4 つの化学塩基で構成されるコードとして保存されている。人間の DNA は約30億の塩基で構成されており、それらの塩基の99%以上が全ての人に共通している。これらの塩基の順番または連続は、生物の構築および維持に利用できる情報を決定するが、これはアルファベットがある特定の順序で出現して、単語や文を形成するのと同じである。